山上憶良の叙述の方法

――対句表現と指示語の関連――

田中真理

一

山上憶良の歌については、その主題及び表現の両面における個性的なありように対し、従来論が積み重ねられてきた。なかんずく、語彙の独自性に関しては、漢詩文に学んだとされるものが見える一方、記紀歌謡、琴歌譜等を採り入れた表現も随所に見受けられる。かかる異質の表現の混在するありようは、憶良の歌の特色といえよう。同様の傾向は対句表現にも指摘しうるが、歌における機能という点については、表現の出自の問題をも含んで、なお検討を要する。

たとえば、次の「日本挽歌」の対句は、叙述における位置づけを一瞥しただけでは把握しがたい例といえる。

大君の　遠の朝廷と　しらぬひ　筑紫の国に　泣く子なす
慕ひ来まして
息だにも　いまだ休めず　年月も　いまだあらねば
心ゆも　思はぬ間に　うちなびき　臥やしぬれ
言はむすべ　せむすべ知らに　石木をも　問ひ放け知らず
…にほ鳥の　二人並び居　語らひし　心そむきて　家離りいます

（巻五・七九四）

この歌は、神亀五年七月二十一日に、憶良がおそらく大伴旅人に奉ったものと察せられる。「臥やしぬれ」までの前半部は、旅人の妻が筑紫に随行し、そのまま彼の地で亡くなったことを示す。彼女の死が突然であったことは、「心ゆも　思はぬ間に」に端的に表れており、「息だにも…年月も…」の対句は等価の表現といえよう。ただし、そのありようはいわば挿入句的であり、仮にこの対句が見えない場合を想定したとしても、歌意にさしたる変化が認められる訳ではない。それだけに、憶良がこの対句を敢えて詠み込んだ意識について、あらためて考える必要があるのではないか。

先ず、詠み込まれた語句に目を向ければ、七音句の「いまだ」の繰り返しが注目されよう。この類句が、『古事記』の神代の条、八千矛神が沼河比売の家に通うくだりにおいて見受けられる。

八千矛の　神の命は　八島国　妻枕きかねて　遠々し　高志の国に
賢し女を　有りと聞かして
妙し女を　有りと聞こして
さ婚ひに　在り立たし
婚ひに　在り通はせ
大刀が緒も　いまだ解かずて
襲をも　いまだ解かねば
嬢子の　寝すや板戸を
押そぶらひ　我が立たせれば
引こづらひ　我が立たせれば
青山に　鵺は鳴きぬ
さ野つ鳥　雉は響む
庭つ鳥　鶏は鳴く

（『古事記』歌謡・二）

ここに見える対句の連続のうち、第三対句「大刀が緒も　いまだ解かずて　襲をも　いまだ解かねば」については、本居宣長『古事記伝』（十一之巻）が、「さて此處にて語を絶て、次ノ句には連けず、下の阿遠夜麻爾ニ々の處に係て心得べし」と指摘するように、八千矛神の焦燥を示しつつ後の三並対に係ると捉えられる。三並対は、「青山」の「鵺」、「野」の「雉」、「庭」の「鶏」という、遠近の順による空間的な語の並びによって、夜明けが近づくことに対する切迫感を表していよう。「嬢子の　寝すや板戸を」に続く第四対句は、板戸を押し揺さぶる八千矛神の焦燥を示す点で第三対句とは並列的にあり、同様に三並対に係ると認められる。そこにおいて、対句は、歌謡の進行に沿った事の経過をうたう上で機能するに過ぎない。

かような対句と後続句とを、叙述において意識的に関わらせたのが、柿本人麻呂である。「高市皇子尊城上殯宮之時」の歌後半部が参照されよう。

あかねさす　日のことごと　鹿じもの　い這ひ伏しつつ
ぬばたまの　夕に至れば　大殿を　振り放け見つつ
鵠なす　い這ひもとほり
侍へど　侍ひ得ねば
春鳥の　さまよひぬれば　嘆きも　いまだ過ぎぬに
思ひも　いまだ尽きねば
言さへく　百済の原ゆ　神葬り　葬りいませて…神ながら
鎮まりましぬ　然れども…万代に　過ぎむと思へや
天のごと　振り放け見つつ　玉だすき　かけて偲はむ　恐
くありとも

（巻二・一九九）

引用部の第二対句、「侍へど　侍ひ得ねば　春鳥の　さまよひぬれば」は、前二句と後二句とが条件句で連接しており、対句における一般的な句の対応とは異なる。ただし、七音句において「佐母良比得ねば」「佐麻欲比ぬれば」のように音を対応させつつ、人麻呂が対句形式の中において叙述の転換を企図したと見做しうる表現である。次の、「嘆きも　いまだ過ぎぬに　思ひも　いまだ尽きねば」は、舎人達の悲しみを表すが、後続の、皇子が城上の宮に葬られる叙述とは直接せず、むしろ、末尾における「偲ひ」の由来する心情を示す。[1] かかる条件句による緊密な構成は先立つ例に見えない。ここに、人麻呂の、条件句を歌の構成の軸として詠み込む態度が窺える。

「日本挽歌」の対句については、先立つ二例の、語句の面における影響が認められよう。ただし、独自のありようを呈するのが反歌との関連である。知られるように、「日本挽歌」は、長歌に反歌五首を付す構成を持つ。

家に行きていかにか我がせむ枕づくつま屋さぶしく思ほゆべしも　（巻五・七九五）

はしきよしかくのみからに慕ひ来し妹が心のすべもすべなさ　（七九六）

悔しかもかく知らませばあをによし国内ことごと見せましものを　（七九七）

妹が見し楝の花は散りぬべし我が泣く涙いまだ干なくに　（七九八）

大野山霧立ち渡る我が嘆くおきその風に霧立ち渡る　（七九九）

これらの反歌には、伊藤博氏『萬葉集の表現と方法　下』（第八章第二節）が指摘した「家」と「旅」の対比の構造を見ることが出来る。また、芳賀紀雄氏「山上憶良―老身重病経年辛苦及思児等歌―」（『萬葉集における中国文学の受容』所収）が指摘するように、反歌は長歌の叙述を遡る形での対応が見える。驥尾に付すならば、長歌における「妹」についての「家離りいます」と対応させ、反歌第一首の「家に行きて」を、憶良は残された「我」の行動として詠む。それを受ける第二首、第三首において、二度詠み込んだ「かく」に注意する必要があるだろう。

反歌第二首の初句「はしきよし」は、窪田空穂氏『萬葉集評釈』以下が指摘するように独立句と認められ、そこで切れると判断される。第二句「かくのみからに」は、

三輪山の山辺真麻木綿短木綿かくのみからに長くと思ひき　（巻二・一五七、高市皇子）

を踏まえ、長歌の「息だにも…臥やしぬれ」と応じた、「妹」の早過ぎる死についての表現と捉えられよう。第三句以降の「慕ひ来し妹が心のすべもすべなさ」についても、長歌の「大君の…慕ひ来まして」との対応を認めうる。

ここで問題となるのは、結句「すべもすべなさ」の解釈である。これと対応する、長歌の「言はむすべ　せむすべ知らに」は、人麻呂「妻死之後、泣血哀慟作歌」の第一長歌、

…言はむすべ　せむすべ知らに　音のみを　聞きてあり得ねば　我が恋ふる　千重の一重も　慰もる　心ありやと…　（巻二・二〇七、人麻呂）

を採り入れたものであり、後に残された者のやるせない情を示す。「すべなし」については、長歌のように、挽歌における残された者の悲しみを表すか、或いは、自らの恋心の切なさに用いるのが一般的であり、反歌のように、「妹が心」に対して「すべもすべなさ」と用いる例は他に見えない。ただし、注目すべきは、「妹」が長歌において「泣く子」に譬えられることである。かかる譬喩の先立つ例に、舎人吉年「田部忌寸櫟子任二太宰一時歌四首」（第一首）の、

衣手に取りとどこほり泣く子にもまされる我を置きていかにせむ　（巻四・四九二）

がある。憶良はこれを意識し、舎人吉年の例とは逆に、「我」を慕い、「筑紫」に随行してきた「妹」に対して、「泣く子」の

譬喩を用いたのだろう。それを踏まえるならば、反歌の「すべもすべなさ」は、長歌において「泣く子」に譬えられた「妹が心」の「すべなき」さまを表し、いわば「妹」への愛情を逆説的に表明したものかと思われる。かような愛情の表明は、「思子等歌」の「まなかひに　もとなかかりて　安寝しなさぬ」（巻五・八〇二）にも見受けられる。窪田氏『評釈』が、この反歌第二首の「評」において、「結句の「術も術なさ」は「愛しきよし」の繰り返しで相応じる言いあらわし」としたのは、肯綮に当たっていよう。

また、反歌第三首についての諸注釈書の見解は、初句で切れるとして、かつがつ一致する。「かく知らませば」は、おそらく、

かからむとかねて知りせば大御船泊てし泊まりに標結はましを　（巻二・一五一、額田王）

を踏まえた表現で、反歌第二首と同じく、「妹」の早過ぎる死を指す。とするならば、反歌第二首、第三首は構成の上で一対と見做しうるのに加え、各々第三句以下において、「妹」の心と「我」の心の対比が見て取れよう。

同様の構成は、反歌第四首にも認められる。憶良は、初句から第三句において、「妹」のゆかりの「楝の花」を、第四句以下の「我」の叙述と対比させる。加えて、長歌、反歌で同様の表現を詠み込みつつ、立場を異にする手法を用いていよう。長歌では、「妹」の死について「いまだ休めず」「いまだあらねば」と詠むのに対し、反歌では、自らの悲嘆について「いまだ干なくに」と詠む。これは、先述の、反歌第二首における「すべなし」の詠み方と通底する手法といえる。さらに、先掲、芳賀氏論の指摘した、反歌第五首の、「妹」の火葬の煙と、「我」のいわゆる「嘆きの霧」とを重ね合わせる趣向は、この対比の構成を反歌第五首において受け止め、歌群全体を結ぶ役割を果たすものと把握される。

かような対比の構成は、そもそも長歌において見受けられるものである。長歌冒頭から「臥やしぬれ」までの、「妹」の叙述に対し、「言はむすべ」から「いかにせよとか」までの「我」の叙述があり、そこから末尾の「にほ鳥の」以下へと移行する。反歌五首を詠む際、憶良は、長歌との対応を意識しつつ、「妹」と「我」、及び「家」と「旅」の対比を縦横に織り込んだといえよう。反歌第二首、第三首の「かく」は、各々対比を含んだ第三句以下の展開の起点となり、心中の拭い去りようもない自責の念を表す。この「かく」の繰り返しについては、長歌の対句において「妹」の死に対する嘆きを繰り返しうたうさまと即応したありようが認められる。

このように、憶良は「日本挽歌」において、指示語を反歌に詠み込み、長歌と対応させつつ、展開の契機の一つとしたといえよう。同時に、長歌と反歌において、同様の表現を立場を異にして詠み込む手法を用いたことも見過ごせない。憶良の歌においては、尻取式繰り返しを用いず、対句を指示語と関連させて叙述を行う点を特徴的に見出しうる。とすれば、彼の方法を探るにあたり、かかる叙述について向けた意識を充分に把握しなければならない。以下、その点に執して検討を試みる。

二

先ず、長歌における指示語の例で看過しえないのは、七夕歌の対句である。憶良は、連続する五つの対句のうち、第三対句の五音句に、指示語を詠み込む。

彦星は　織女と　天地の　分かれし時ゆ　いなむしろ　川に向き立ち
思ふそら　安けなくに
嘆くそら　安けなくに
青浪に　望みは絶えぬ
白雲に　滞は尽きぬ
かくのみや　息づき居らむ
かくのみや　恋ひつつあらむ
さ丹塗りの　小舟もがも
玉巻きの　真櫂もがも〈一云、「小棹もがも」〉
朝なぎに　いかき渡り
夕潮に〈一云、「夕にも」〉い漕ぎ渡り
ひさかたの　天の川原に　天飛ぶや　領巾片敷き　ま玉手の　玉手さし交へ　あまた夜も　寝ねてしかも
〈一云、「眠もさ寝てしか」〉秋にあらずとも〈一云、「秋待たずとも」〉

（巻八・一五二〇）

反歌

風雲は二つの岸に通へども我が遠妻の〈一云、「愛し妻の」〉言そ通はぬ

（一五二一）

たぶてにも投げ越しつべき天の川隔てればかもあまたすべなき

（一五二二）

右、天平元年七月七日夜、憶良仰観天河。一云、帥家作。

ここで注意されるのは、類句との相違である。次に掲げる例は、いずれも七夕歌の第一対句と第四対句に類する表現を持つ。

遠妻の　ここにしあらねば　玉桙の　道をた遠み
思ふそら　安けなくに
嘆くそら　苦しきものを
み空行く　雲にもがも
高飛ぶ　鳥にもがも…

（巻四・五三四、安貴王）

見渡しに　妹らは立たし
この方に　我は立ちて
思ふそら　安けなくに
嘆くそら　安けなくに
さ丹塗りの　小舟もがも
玉巻きの　小梶もがも
漕ぎ渡りつつも　語らふ妻を

（巻十三・三二九九）

両者は、遠く離れた妻と逢えぬ嘆きをうたう例であり、七夕歌との先後関係は明らかでないものの、おそらくは、かような表現の類型があったかと推測される。ともに、「思ふそら…嘆くそら…」という対句による苦悩の表現から、妻と逢う手立てを希求する表現へと移行するのに対し、憶良は七夕歌において、間に第二対句「青浪に…白雲に…」と第三対句「かくのみや…かくのみや…」を詠み込んでおり、その表現の意味を問う必要があるといえよう。

第二対句については、小島憲之氏『上代日本文学と中国文学

中』（第五篇第六章）が指摘するように、「青浪」が漢語「青浪」、「青波」、或いは「滄波」「蒼波」の訓読による歌語と考えられ、[2]詩の手法に倣った「青（滄・蒼）―白」の色対も見える。この色対は詩において散見され、次の七夕詩にも、

白露含明月、青雲断絳河。

（初唐杜審言「七夕詩」『芸文類聚』歳時部中・七月七日）

の如く見える。「青浪」（青波・滄波・蒼波）は、たとえば、

滄波[3]不可望、望極与天平。

（斉謝朓「望海詩」『芸文類聚』水部上・海水）

滄波不可望、行雲聊共因。

（北周王褒「別陸才子詩」『芸文類聚』人部十三・別上）

が端的に示す如く、概ね、果てしなく続く波の印象を喚起する語であり、「白雲」と対になる、

白雲凝絶嶺、滄波間断洲。

（陳張正見「遊龍首城詩」『芸文類聚』人部十二・遊覧）

のような例も見受けられる。[4]また、小島氏が指摘された、

魂帰滄海上、望断白雲前。

（初唐駱賓王「敘寄員半千」『駱臨海集』巻三）

という、色対とともに「白雲」に「望断」を用いる例に加え、『新日本古典文学大系　萬葉集二』が指摘する、

緘〈一作、裁〉書待還使、涙尽白雲〈一作、日南〉天。

（初唐上官儀「王昭君」『全唐詩』巻四十）

のような、「涙尽」の語が見える例も参看される。

憶良は、かような例を踏まえ、「青浪―白雲」の対を詠んだと理解されるが、第二対句は七夕歌の表現としては特異性が際だつ。というのも、「青浪―白雲」の対が、先立つ七夕詩に見えないばかりでなく、第二対句と対応する第五対句の「夕潮」が、契沖『萬葉代匠記』（初稿本）以下が指摘するように、川の表現にはそぐわず、むしろ海を想起させるからである。これと関連した、伊藤博氏『萬葉集釈注』の、「小棹」から「真櫂」へ、「夕にも」から「夕潮に」へという、異文系統から本文系統への改変に第四対句と第五対句の対応を見る重要な指摘がある。また、広い天の川（長歌・第一反歌）と狭い天の川（第二反歌）の対比があるという氏の指摘に従えば、憶良が、長歌において妻との隔たりを詠むに際し、「夕潮」の語を意図的に詠み込んだことになり、さらなる注意が必要となる。

天の川と海の関わりについては、『芸文類聚』（水部上・海水）の、「博物志曰、旧説、天河与海通。」という記述[5]に見出しうる。この「水部上・海水」の項には、先掲、斉謝朓「望海詩」を収め、「滄波」の語も見えることから、憶良が対句を詠む際に参考とした可能性があるだろう。さらに、注目されるのは、『芸文類聚』（水部上・江水）に、「春秋元命苞曰、牛女為江潮。江潮者、所以開神潤化。故其気湍急。」という、牽牛織女と長江の潮の満ち引きとの関連をいう記述が見えることである。加えて、同じく「水部上・江水」所収の、梁王台卿「臨滄波詩」において、「風来白華起、潮満黄沙沈」のような、長江の「潮」を詠み込む例があることも見逃せない。かかる例を念頭に置き、憶良は、妻と逢えぬ嘆きを強調すべく「夕潮」を詠み込み、隔たりの大きさを対句によって表現したかと思われる。

続く、「かくのみや　息づき居らむ　かくのみや　恋ひつつあ

らむ」は、次の、

「昼はも　うらさび暮らし
　夜はも　息づき明かし　　（巻二・二一〇、人麻呂）

のような、挽歌に見える表現を踏まえていよう。ここで問題となるのは、五音句の指示語である。伊藤博氏は、『萬葉集の表現と方法　上』（第三章第四節）において、「第三者的立場」から歌い起こして「当事者的立場」へ転ずる詠法が存在したことを想定され、また、『萬葉集の歌群と配列　下』（第八章第一節）では、長歌冒頭から第二対句までを第三者、第三対句以降の長歌と二首の短歌を彦星（牽牛）の立場の詠とし、前半の状況設定を踏まえてそれを背景に当人の嘆きに入って行く、「牽牛の苦悶のさまを浮き立たせようとしての工夫」とされた。そこにおいて、同様の構成を持つ例として挙げられたのが、先に掲げた『古事記』の歌謡である。

八千矛の　神の命は　八島国　妻枕きかねて　遠々し　高志の国に
「賢し女を　有りと聞こして
「妙し女を　有りと聞こして
　…嬢子の　寝すや板戸を
「押そぶらひ　我が立たせれば
「引こづらひ　我が立たせれば　　（『古事記』歌謡・二）

この場合、冒頭の「八千矛の　神の命は」を受け、「押そぶらひ…引こづらひ…」の対句において「我が」と明示されることが、人称転換の証左となる。かような人称転換は、土橋寛氏『古事記歌謡全注釈　古事記編』が指摘するように、先ずは歌謡の基本的な構成、すなわち、主題の提示（客観的抒情）―説明（主観的抒情）が基本にあるものと捉えうる。対して、憶良の歌では途中で歌謡のように第一人称が明示される訳ではない。それだけに、第三対句「かくのみや　息づき居らむ　かくのみや　恋しくあらむ」の解釈が肝要となるだろう。

そこで、五音句の「かく」に着目すれば、先行句において指示内容が明示される場合とされない場合に大別しうる。前者については、憶良以外では僅かに、

香具山は　畝傍雄雄しと　耳成と　相争ひき
神代より　かくにあるらし…　　（巻一・一三、天智天皇）

を数えるに過ぎない。大方は、「かく」の前に指示内容が明示されない例で、

かくばかり恋ひつつあらずは高山の磐根しまきて死なましものを　　（巻二・八六、磐姫皇后）
古りにし嫗にしてやかくばかり恋に沈まむ手童のごと　　（巻二・一二九、石川女郎）

のように、「思ふ」「恋ふ」などの語と共に詠み込まれ、相聞的発想の例に多く見受けられる。この場合、具体的な状況が言外にかずけられることによって、却って「情」を強調することになる。七夕歌の翌年に、憶良自身が、第三対句の前二句を再び用い、旅人に対して、帰京がかなわぬまま、筑紫の地で過ごす嘆きを詠んだ、

かくのみや息づき居らむあらたまの来経行く年の限り知らずて　　（巻五・八八一）

なども、同様に理解されよう。

七夕歌の第三対句については、指示語と七音句の「息づく」「恋ふ」との関連において、やはり後者に同じい。品田悦一氏「憶良の七夕歌十二首」(『セミナー万葉の歌人と作品　第五巻　大伴旅人・山上憶良(二)』所収)が指摘するように、七夕歌の第一対句を「当事者的」な表現とも解しうるとすれば、その所以は、かかる指示内容を明示しない「かく」にあるといえよう。ただし、第一対句と第三対句の対応、及び、第二対句が、彦星の行く手を阻む物の提示であり、第四対句がそれと対応した、「小舟」と「真櫂」を希求する表現であることを考慮するならば、「かく」は、現状を示しつつも、同時に、先行する嘆きの表現を指すと捉えられるのではあるまいか。つまり、第一対句から展開する彦星の嘆きの表現は、第二対句の、渡河を阻むものの提示によって具体化される。そして、第三対句の指示語はそれを引き受けつつ、慨嘆するさまをうたい、第二対句と対応した第四対句を導き、同様に第二対句との対応が見える第五対句へと展開する次第となろう。とりわけ、先行歌に倣う第一対句の後に、第二対句のような詩に基づいた表現を取り合わせること、及び、彦星の心中を句の対照を持たない第一、第三対句において表し、第二、第四対句で絶望と希求を視覚的表現で示すことは、格別の配慮を以て詠み込んだものに相違ない。

如上の、対句と指示語の組み合わせは、憶良が、先立つ、指示内容を明示しない「かく」の例を踏まえつつ、対句の描写性に着目し、対句相互の対応関係を意識して詠み込んだものといえよう。そこにおける対句の連続は、彦星の内面の揺れを具体化し、嘆きを形象化すべく用いた憶良の技法と理解される。

三

かような「情」を強調する「かく」の用法に対し、憶良が数度にわたって用いた、先行する対句を受け、「理」として示す「かく」の例を見過ごす訳にはゆかない。端的な例として、神亀五年の作「令反惑情歌」の冒頭を挙げうる。

父母を　見れば尊し
妻子見れば　めぐしうつくし
世の中は　かくぞ理
もち鳥の　かからはしもよ　行方知らねば　(巻五・八〇〇)

ここに見える対句は、言うまでもなく、長歌に付された漢文序の、「知敬父母、忘於侍養、不顧妻子、軽於脱屣」と対応し、「倍俗先生」を教え諭すべく、序の後半に示された「三綱」の「父母」及び「夫婦」の道を詠んだ箇所といえる。

歌において、父母妻子を詠んだものについては、数例見出しうる。先ず、天平元年の大伴三中「摂津国班田史生丈部竜麻呂自経死之時」の歌に、

天雲の　向伏す国の　もののふと　言はるる人は…祖の名も　継ぎゆくものと
母父に　妻に子どもに　語らひて　立ちにし日より…
(巻二・四四二)

とあり、巻十三にも、

母父も妻も子どもも高々に来むと待ちけむ人の悲しさ
(巻十三・三三三七)

の如く見える。なお、この反歌が付された長歌には、

鳥が音の　かしまの海に　高山を　隔てになして…うらもなく　臥したる人は

母父に　愛子にかあらむ
若草の　妻かありけむ　（巻十三・三三三六）

のように、「子」が詠み込まれていないものの、「母父」「妻」を詠み込んだ対句が見え、反歌と対応する。[10] これらの歌においては、「旅」に対する「家」という構造が認められ、その中において、「母」「父」「妻」「子」の提示があるといえよう。

同様の「旅」と「家」の構造は、憶良「敬和為熊凝述其志歌」においても認められる。前半部の「うちひさす　宮へ上ると　たらちしや　母が手離れ…いつしかも　都を見むと思ひつつ　語らひ居れど」は、「子」としての自らの立場を前面に出し、熊凝の少年らしい都への思いを表していよう。しかし、都を見ること叶わず、志半ばにして「旅」に臥す無念とともに、「家」で帰りを待つ両親へと意識が向かうさまを次のように表現する。

国にあらば　父取り見まし
家にあらば　母取り見まし　世の中は　かくのみならし
犬じもの　道に伏してや　命過ぎなむ（一六、我が世過ぎなむ）
（巻五・八八六）

ここに見える「国―家」の対については、巻十三に、

こと放けば　国に放けなむ
こと放けば　家に放けなむ
天地の　神し恨めし　草枕　この旅の日に　妻放くべしや
（巻十三・三三四六）

とあり、やはり旅先での死を詠む歌において用いられる。[11] また、五音句の仮定条件については、人麻呂の、いわゆる「石中死人歌」における、

家知らば　行きても告げむ
妻知らば　来も問はましを　（巻二・二二〇）

を意識したに相違ない。ただし、憶良の場合、行路死人を見て第三者的立場で詠むのではなく、熊凝に成り代わっての作であり、「旅」において死す熊凝の「家」を切望する思いについて、「父―母」の対を用いたと察せられる。

翻って、「令反惑情歌」については、序に「未験修行得道之聖、蓋是亡命山沢之民」と、「家」を捨てる者への批判が見えることに鑑み、「父母―妻子」の対を、「家」との関わりにおいて提示したものとひとまずは捉えうる。注意されるのは、憶良が「父」「母」の順で提示することである。とりわけ、熟語の例については、先立つ作者の明らかな例で、「父母」と詠み込むものを見出し難い。[12] とはいえ、「母父」「母父」[13]についても同様で、作者未詳歌以外では、先掲の大伴三中の歌が早い例である。和語の「母父」については、早く井上通泰『萬葉集新考』が「父母の古語」とし、以後の諸注もそれに従う。その根拠となるのは、たとえば、『日本書紀』神武天皇（即位前紀）の条における、

仍指其樹曰、恩如母。時人因號其地、曰母木邑。
今云飫悶廼奇訛也。

であり、「母」を先に言う「母父」は古語「おも」をとどめた語で、そこに古代母系制の名残りを見る説もある。[10]

対して、憶良の歌に見える「父母」は、「母父」の表現の流れを汲むのではなく、おそらくは、漢語「父母」を和語として採り入れたものであろう。また、「妻子」についても、他には、左注に憶良作とも見える「筑前国志賀白水郎歌」、及び憶良の表現を踏まえた家持の歌[11]において見出しうるにとどまる。「父母—妻子」の対については、詩賦には例を見出し難いものの、散文においては、対及びそれらが並び称される例が散見する。

夫人情、莫レ不ト貪レ生悪レ死、念二父母一、顧二妻子一。
（漢司馬遷「報二任少卿一書一首」『文選』巻四十一）

高曰、人情豈不二各愛一其父母妻子一哉。
（『漢書』巻三十二、陳餘伝第二）

これらは、いずれも人の「情」を述べる上で、「父母」「妻子」を採り上げたものである。なお、次の仏書に、

臣笑曰、三元誠云、道学不レ得二懐一挾悪心一、不レ孝二父母一、不二愛一妻子一。
（『広弘明集』巻九「笑道論」『大正新脩大蔵経』史伝部四）

禽獣猶ト有二母子一而知レ親。況聃・喜、行二道於天下一、斬其父母、何名レ孝乎。戮二其妻子一、豈謂レ慈乎。
（『広弘明集』巻十三「弁正論」『大正新脩大蔵経』史伝部四）

とあるように、道教を批判する文脈において「父母」「妻子」の提示が見える。これについても、やはり、人の「情」との関わりで、「父母」「妻子」を例に挙げて述べたものと捉えうるだろう。「令レ反二惑情一歌」の対句については、かかる発想が根底にあり、漢語「父母」への意識から、「父母—妻子」の対を詠み込んだと看取される。

さらに、それらを「見れば」と詠む点にも目を向ける必要がある。周知の如く、「〜見れば（…見ゆ）」は、元来、国見歌に見える形式であり、「見れば」の前には概ね景物が詠み込まれる。それ以外の例については、たとえば、赤人の難波宮行幸時の作に、

…淡路の　野島の海人の…舟並めて　仕へ奉るが　貴き見れば。
（巻六・九三三）

と見出しうるが、この場合、景物の代わりに人々の奉仕のさまを「見る」と詠んでおり、国見歌の表現の系列に連なるものとして捉えてよい。個人に対して「見れば」を用いる例には、

もみち葉の散り行くなへに玉梓の使を見れば逢ひし日思ほゆ
（巻二・二〇九、人麻呂）

のように、亡き人のゆかりの人を詠み込むものや、

朝鳥早くな鳴きそ我が背子が朝明の姿見れば悲しも
（巻十一・三〇九五）

のように、「見れば」の後に「情」を表す語が見える例も残る。ただし、この場合の「悲しも」は、夜明けに帰る男の姿によってもたらされる後朝の別れの悲しみを示し、「令レ反二惑情一歌」のように、その人を見て自ずと湧き上がる感情をうたうこととは相違する。すなわち、憶良の対句と同様の例は、先立つ歌において見出しがたく、特異な表現と把握されよう。

ここで問題となるのは、五音句における「父母（ちちはは）―妻子（めこ）」の対と七音句との関わりである。前二句の、「父母」を「尊し」としてことさらに例示するものについては、一般に例を検出し難く、[12]憶良が、国見歌の「見れば貴し」という讃め詞を人に用いたものかと思われる。なお、人について「尊し」とする例は天皇及び皇太子に限られるが、あるいは、人麻呂が日並皇子の統治した世を仮定して詠んだ、「春花の　貴からむと　望月の　たたはしけむと」（一六七）を参考とした可能性もあるだろう。

また、後二句についても、「妻子」と「めぐしうつくし」との関連が注意される。「めぐし」については、「愍久（めぐく）」（巻十一・二五六〇）という例が残ることから、鹿持雅澄『萬葉集古義』が指摘するように、「愍愛」といった語を想定しうる。この語は史書等に数例認めうるが、「愍痛」「愍察」等の語構成からも察せられるように、「愍愛」は概ね「あわれむ」の謂で用いられ、憶良の対句と必ずしも合致する訳ではない。ただし、仏典において、僅かではあるが、子について用いた、

時二童子。知二父情一捨、悲號啼泣。…心懷二悒悵一、満二目涙流一、便以二伽他一告二愛童一曰。子等汝応一知、我非一不二愛愍一。

（『根本説一切有部毘奈耶破僧事』巻十六　『大正新脩大蔵経』律部三）

の他、譬喩としての使用例、

如下大長者唯有二一子一愍愛情重上、菩薩大悲亦復如一是、於二諸衆生一愛一之若一子。《後略》

（『大方等大集経』巻二十九、『大正新脩大蔵経』大集部）

が見えることは参考となろう。

さらに、看過しえないのは、契沖『萬葉代匠記』（初稿本・精撰本）の引く、『日本書紀』神代下、「故皇祖高皇産霊尊、特鍾二憐愛一以崇養焉。」の「鍾憐愛」について、『日本紀私記』（乙本）に、「女久之止於毛不美己々呂乎安津女天」の訓が見えることである。[13]澤瀉久孝氏『萬葉集注釈』は、これを引き、「めぐし」について「憐愛」の文字に相當する」と指摘する。それを踏まえて、漢語「憐愛」の例に目を向けるならば、「鍾憐愛」について『書紀集解』が引く、

左師公曰、老臣賤息舒祺、最少、不肖、而臣衰、竊憐愛之。

（『史記』巻四十三、趙世家第十三）

が注視されよう。また、仏典においても、譬え話の中で用いられた、

射師有一子憐愛甚重。《後略》

（『大宝積経』巻一百一、『大正新脩大蔵経』宝積部二）

のような例や、子への愛情の譬喩としての例、

王、性慈仁。愍二念一切一。猶如二慈父憐一愛其子一。一切人民親一敬於王。

（東晋法顕訳『大般涅槃経』中　『大正新脩大蔵経』阿含部二）

なども見受けられる。とすれば、先ず「父母（ちちはは）―妻子（めこ）」の対が憶良の念頭にあり、「尊し」の対として、漢語「愍愛」あるいは「憐愛」を意識し、「めぐしうつくし」と詠んだかと思われる。[14]

当面の対句は、「悲嘆俗道仮合即離、易一去難一留詩」（八九七・前）の「五戒」について、「謂二父義母慈兄友弟順子孝一。」と自ら注するように、おそらくは儒教的発想に基づきつつ、表

現については仏典等を利用した句作りを行ったものといえよう。かかる内容を、対句によってことさらに「世の中」の「理」として提示することは、「思二子等一歌」（八〇二）の序における、「況乎世間蒼生、誰不レ愛レ子乎」と同様の発想によるもので、後続の「もち鳥の　かからはしもよ　行方知らねば」を強調するためのものに他ならない。そのように、人として自然と湧き起こる「情」を含む「世間」の提示に対して、「敬レ和為レ熊凝一述二其志一歌一」においては、「…父取り見まし…母取り見まし」から逆説的に道の途中で死むさだめとしての「世の中」が見える。その点で微妙な差異が認められはするが、末尾の、「犬じもの　道に伏してや　命過ぎなむ」において、嘆きを強調すべく対句の後に指示語を用いる点については、「令レ反二惑情一歌」と同様の技法を用いたと認められる。

憶良は、対句によって語句を提示する際、漢語に倣った意識的な句作りを行ったといえよう。とりわけ、対句を指示語で受ける表現は、憶良が、後続する末尾の「情」を強く打ち出すために、それに対する「理」を提示した表現と捉えられる。

四

指示語を、前に提示した「理」と関わらせる技法は、憶良の中では既に確立したものであっただろう。かかる指示語が反歌と関わりを持つのが、「哀二世間難一住歌」である。

世の中の　すべなきものは　年月の　流るるごとし…
娘子らが　娘子さびすと　韓玉を　手本に巻かし
〈或有二此句一云、「白たへの　袖振り交はし　紅の　赤裳裾引き」〉
よち子らと　手携はりて　遊びけむ　時の盛りを　留みかね　過ぐしやりつれ
「蜷の腸　か黒き髪に　いつの間か　霜の降りけむ
紅の〈一云、丹のほなす〉面の上に　いづくゆか　皺が来りし
〈一云、常なりし　笑まひ眉引き　咲く花の　うつろひにけり　世の中は　かくのみならし〉
ますらをの　壮士さびすと
「剣太刀　腰に取り佩き　赤駒に　倭文鞍うち置き　這ひ
さつ弓を　手握り持ちて」
乗りて　遊びあるきし　世の中や　常にありける…
手束杖　腰にたがねて　か行けば　人に厭はえ
かく行けば　人に憎まえ　老よし
男は　かくのみならし
たまきはる　命惜しけど　せむすべもなし（巻五・八〇四）

反歌

常磐なすかくしもがもと思へども世の事なれば留みかねつも　（八〇五）

示したように、「娘子」の叙述には三カ所の異文があり、そこに見えるのが、「白たへの　袖振り交はし　紅の　赤裳裾引き」の対句である。「袖―裳」の対は、憶良の例を踏まえた大伴池主の例が見えるのみであり、[17]「袖」を「振り交はす」とい

う表現についても、家持の歌に一例を数えるにとどまるが、[18]次の志貴皇子の例、

采女の袖吹き返す明日香風都を遠みいたづらに吹く　（巻一・五一）

及び、序として地名「布留」に冠せられた、

娘子らが袖布留山の瑞垣の久しき時ゆ思ひき我は　（巻四・五〇一、人麻呂）

の如く、娘子と縁の深いものとして「袖」を詠み込む例を見出しうる。一方、「紅の　赤裳裾引き」については、人麻呂歌集歌に、

住吉の出見の浜の柴な刈りそね娘子らが赤裳の裾の濡れて行かむ見む　（巻七・一二七四）

と見えるのに加え、巻十一にも全くの同一句を見出しうる。

立ちて思ひ居てもぞ思ふ紅の赤裳の裾引き去にし姿を　（巻十一・二五五〇）

なお、付言すれば、『文選』所収の詩、晋陸雲「為顧彦先贈婦二首」（其二）に、

鳴簧発丹脣、朱絃繞素腕　（『文選』巻二十五、贈答三）

の如く、「丹―素」の色対が見えることも参考となるだろう。すなわち、憶良は、美しい女性の形容として、先ずは「紅の赤裳裾引き」を想起し、そこに「白たへの　袖振り交はし」を合わせたと解しうる。

次の「蜷の腸…紅の…」の長対は、娘子の老いて行くさまを描写する点が注目される。また、前四句に見える白髪を霜に譬える表現は、先立つ、

ありつつも君をば待たむうち靡く我が黒髪に霜の置くまでに　（巻二・八七、磐姫皇后）

をおそらくは想起したであろう。さらに、女性の美及びその衰退の描出については、『芸文類聚』「老」の項に見える「紅―素（白）」の色対、

軟顔收紅榮、玄鬢吐素華。冉冉逝將老、咄咄奈老何。　（晋陸機詩『芸文類聚』人部二・老）

昔類紅蓮草、自玩[19]淥池邊。
今如白華樹、還悲明鏡前。　（梁簡文帝詩[20]『芸文類聚』人部二・老）

等が憶良の念頭にあったかと思われる。

この異文においては、『新潮日本古典集成　萬葉集二』が指摘するように、娘子の部とますらをの部とがともに二十八句となる。言い換えれば、冒頭の「世の中の　すべなきものは　年月は　流るるごとし」と末尾の「たまきはる　命惜しけど　せむすべもなし」とが対応し、その間に「娘子」と「ますらを」の叙述の均等な配分があったことになるだろう。異文系統も含めた四カ所の対句は、いずれも、若い盛りのさまと老醜のさまの具体的な描写をそれぞれ担う。この「娘子」「ますらを」の叙述を結ぶ際、指示語を用いたことに対して、憶良はかなり自覚的であったと見てよい。「令反惑情歌」「敬和為熊凝述其志歌」において用いた、指示語で先行の文脈を受けて後続句を強調する技法は、「老身重病歌」の、指示語と長歌末尾との関わりにおいても見出しうる。それを、推敲の過程において、「娘子」の叙述を大幅に割愛し、老への変化の相を先立つ

表現に倣った対句による描写のみとしたことは、「老よし男」の叙述を長歌の主眼とし、末尾へ集約させる構成を取る点で重要な意味を持つといえよう。

長歌、本文系統の後半部に見える「かくのみならし」は、直前の対句による老醜の描写を受け、それ以前の叙述も含みつつそこで一度切れて、末尾の三句を強調する。注意されるのは、反歌と長歌末尾との関わりである。上の句「常磐なすかくしもがもと思へども」は、「たまきはる　命惜しけど」と対応し、下の句「世の事なれば留みかねつも」は「せむすべもなし」との対応が見え、長歌冒頭とも響き合う。反歌における「かく」は、直接には「常磐なす」を受けて壮年のさまを指し、希求の表現である点で長歌の場合と異なる。つまり、憶良は、長歌、反歌において同様の指示語を意識的に詠み込みつつ、対照的な意味で用いていよう。そこにおける指示語のありようは、長歌の表現とより密接な関連を持つ点で、「日本挽歌」で用いた方法を一歩進めたものと把握される。

かかる方法を発展させたのが、次に挙げる「老身重病」病、経年辛苦、及思児等歌」（以下、「老身重病歌」とする）ではあるまいか。

たまきはる　うちの限りは（謂、瞻州人壽一百二十年也）
平らけく　安くもあらむを
事もなく　喪なくもあらむを
いとのきて　痛き瘡には　辛塩を　注くちふがごとく
ますますも　重き馬荷に　表荷打つと　いふことのごと
世間の　憂けく辛けく
老い
にてある　我が身の上に　病をと　加へてあれば。
昼はも　嘆かひ暮らし
夜はも　息づき明かし
年長く　病みしわたれば。
月重ね　憂へさまよひ　ことごとは　死ななと思へど。
五月蠅なす　騒く子どもを　打棄てては　死には知らず。
見つつあれば。　心は燃えぬ
かにかくに　思ひ煩ひ　音のみし泣かゆ　（巻五・八九七）

対句と後続句の関係に着目すれば、先ず、平安無事を詠んだとされる第一対句は、逆接を介して「世間の　憂けく辛けく」と対応する。第二対句と後続句は、「沈痾自哀文」の「不但年老、復加斯病。諺曰、痛瘡灌塩、短材截端、此之謂也。」に見える諺と同じ内容を、対句の前二句に譬喩として詠み込んでいよう。第三対句は、先立つ「昼はも　うらさび暮らし　夜はも息づき明かし」（巻二・二一〇、人麻呂）を踏まえて「年長く　病みしわた」るさまを具体的に描写し、第二対句と同様、後続の条件句と密接に関わる。

このように、「老身重病歌」においては、各々表現の出自において異なる性格を持つ対句を、後続句と関連させて配するのに対し、対照的なありようを示すのが、「貧窮問答歌」（巻五・八九二）の叙述である。対句は、後続句とそれぞれ等価であり、具体的な描写を担うものと把握される。先ず、冒頭部の対句、

風雑り　雨降る夜の
雨雑り　雪降る夜は

については、小島憲之氏『上代日本文学と中国文学　中』（第六

章（二）が指摘した、晋陶淵明の例、「風雨縦横至、収斂不」盈、塵、夏日長抱」飢、寒夜無」被眠」（『怨詩、楚調、示」龐主簿鄧治中」』『陶淵明集』巻二）との類似が見える。陶淵明集の詩句の利用については、氏も述べられるように慎重を期さねばならないが、かような風雨の様子を対句によって描写する点が注意される。また、後半部の「答」の叙述においても、

…かかふのみ　肩に打ち掛け　伏せ廬の　曲げ廬の内に
直土に　藁解き敷きて。
父母は　枕の方に
妻子どもは　足の方に　囲み居て　憂へ吟ひ
かまどには　火気吹き立てず　飯炊く　ことも忘れて。…
甑には　蜘蛛の巣かきて
かぐばかり　すべなきものか　世の中の道

とあり、次の例が出典として挙げられる。

丈夫慨二於堂上一、妻妾嘆二於灶閒一。悲風嗷二於左側一、小兒啼二於右邊一。
（晋束晳「貧家賦」『芸文類聚』人部十九・貧）

甑中生」塵范史雲、釜中生」魚范萊蕪。
（『後漢書』巻八一、独行列伝第七一・范冉）

小島氏の指摘を踏まえ、なお考えるならば、貧に喘ぐさまをこのように対句によって描くことは、憶良が意識的に採用した方法であったといえよう。最後の「世の中の道」は、かかる対句による描写の積み重ねを経て、末尾の「かぐばかり　すべなきものか」の嗟嘆の末、提示される。対して、「老身重病歌」においては、逆接及び条件句を多用し、描出した心の揺れを、末尾の「かにかくに」が引き受け、「思ひ煩ひ　音のみし泣かゆ」へと続く。つまり、対句による多様な描写は、「かにかくに」と相応じて機能しており、そこに憶良の構成への意識が窺えるといえよう。

さらに、見過ごしえないのは、次の反歌六首との関わりであり、とりわけ、一対と捉えうる反歌第三首、第四首が注目される。

反歌

慰むる心はなしに雲隠り鳴き行く鳥の音のみし泣かゆ　（八九八）
すべもなく苦しくあれば出で走り去ななと思へど此らに障りぬ　（八九九）
富人の家の子どもの着る身なみ腐し捨つらむ絁綿らはも　（九〇〇）
荒栲の布衣をだに着せかてにかくや嘆かむせむすべをなみ　（九〇一）
水沫なすもろき命も栲縄の千尋にもがと願ひ暮らしつ　（九〇二）
倭文たまき数にもあらぬ身にはあれど千年にもがと思ほゆるかも　（九〇三）

天平五年六月丙申朔三日戊戌作
去神亀二年作之。但以」類故、更載」於茲」

長歌の叙述と比較するならば、村山出氏「老身重病経年辛苦及思児等歌―表現の契機―」（『山上憶良の研究』所収）が指摘するよ

うに、反歌六首は長歌の叙述を遡行する形での対応が認められる。また、先掲、芳賀氏論における、反歌第三首、第四首が、「貧窮困苦」を新たに付加する役割を担い、さらに、「かくや嘆かむせむすべをなみ」が、長歌における病への悲嘆「昼はも嘆かひ暮らし　夜はも　息づき明かし」と応じ、かつ嘆きの重層があるという指摘は重要である。反歌第四首は、第三首の「富人の家の子」の提示に対し、「我」の子を提示する。そこにおける「かく」の嘆きは、反歌において「荒栲の布衣をだに着せかてに」と示されるとともに、芳賀氏が述べられる如く、長歌の嘆きの表現とも対応していよう。

なお、このありようと比較されるのが、次の、山部赤人における尻取式繰り返しである。

春日を　春日の山の　高座の　三笠の山に
朝去らず　雲居たなびき
かほ鳥の　間なくしば鳴く
雲居なす　心いさよひ　昼はも　日のことごと
その鳥の　片恋のみに　夜はも　夜のことごと
立ちて居て　思ひそ我がする　逢はぬ児故に（巻三・三七二）

赤人は、三笠山の景物の提示から人事への転換について、記紀歌謡以来の形式を踏襲しつつも、自らの心情を表すべく景物を詠み込み、意味を重層させる技法を用いた。[21] 対して、憶良は、尻取式繰り返しではなく、指示語の「かく」における、指示内容が明示される場合とされない場合に着目し、意識的に先行句と関わらせることによって、嘆きを重層させる方法を用いたといえよう。かような方法を採用したことは、おそらく、憶良が従前の歌に見えるような景物を歌の材として採り上げなかったことと無関係ではあるまい。

すなわち、憶良は長歌で対句を用いた描写を意識的に採用し、指示語によって総括する叙述を行いつつも、反歌においてそれを用いる場合には、長歌における叙述と重ね合わせ、なおかつ、新たな展開の契機として用いたといえよう。

五

かく見れば、憶良は長歌において、対句による描写を積み重ねることにより、主題を多面的に叙述したといえる。また、対句を指示語で受け止めさせ、後続句を強調させる方法を意識的に用いていよう。かかる主題に沿った情景を対句で描き、指示語で総括して文脈を展開する方法は、七夕歌の心情表現においても見出しうる。指示語の用法には、先行句に指示内容が明示される場合と明示されない場合があるが、七夕歌における指示語はその両様のありようを示し、言外にかずけられた現状を指しつつ、先行句と対応して嘆きを具体的に表現する。そこにおいて、指示語は文脈展開における蝶番の如き役割を果たす。また、「日本挽歌」の反歌における指示語は、長歌の対句における嘆きのさまと同等のありようを示しながら、反歌の展開の起点となる。なお、長歌において「妹」の死に用いた「いまだ…」という表現を、反歌で立場を異にして「我」について用いることは、「妹」と「我」、「家」と「旅」という対比を詠み込む趣向に加え、憶良が同音（同語）を契機として叙述を展開させる

ことに意を払っていたことを示していよう。

かような指示語が、直前の対句による提示を受け、かつ、反歌とも関わるのが、「哀 世間難」住歌」である。長歌の「かく」が、直前の対句による「老よし男」の老醜の描写を総括し、末尾の三句を強調するのに対して、反歌の「かく」は長歌末尾と対応しつつも、対照的に、直前の文脈を受けて「壮」を示す。これは、「日本挽歌」の長歌、反歌における指示語を用いた叙述の方法を進めたものと見做しうる。さらに、「老身重病歌」においては、反歌で指示語を用い、長歌に見えない貧窮の叙述を呼び込み、同時に、「子」への思いによる嘆きと、長歌における病の嘆きとを重層させる。ここに、対句と指示語を緊密な形で関わらせ、なおかつ、新たな展開の契機とするという、方法としての深化が窺える。

すなわち、憶良は、先行の文脈を指す機能に加え、同音（同語）による表現の対応の意識によって指示語を詠み込み、長歌、反歌における表現を重ね合わせる方法を用いたといえる。そこにおいて、尻取式繰り返しのような、同音（同語）による転換を契機とした叙述の方法に代わり、指示語による叙述への交替が認められるが、おそらく、憶良が景物ではなく、人事そのものを詠もうとしたことが要因として関わったといえよう。かかる対句と指示語とを関連させる叙述の方法が、表現の特異性とともに、憶良の歌を独自のものとなさしめたと言えるのではあるまいか。

注

（1）拙稿「柿本人麻呂の対句表現」「日本語と日本文学」四〇、平成十七・二。

（2）ただし、詩賦において、「青浪」の例は一般に検出しがたい。また、「青波」については、「況復君在 交河 、妾在 青波。」（北周庾信「哀 江南 賦」）『庾子山集』巻二）という例が見える。

（3）『古詩紀』（巻六十二）では、斉鍾憲の作（「登 群峯標 望」海」）として、「蒼波」に作る。

（4）なお、書の例に、「白雲在」天、蒼波無」極。」（梁簡文帝「与」蕭臨川書」）『芸文類聚』（人部十四・別下）なども残る。

（5）『芸文類聚』、『博物志』は、以下に、某人が海にいかだを浮かべて天の川に行き着き、牽牛織女と出会う話を載せる。この話は、『荊楚歳時記』にも収載されており、別に、漢張騫が天の川の河源を尋ねた話が見える。なお、『俊頼髄脳』、『今昔物語集』（巻十）などに類話が見えるが、海ではなく、張騫が河源を尋ねて行き着いた先で牽牛織女と出会った、とする。

（6）「或本歌」として、長歌は、「備後国神嶋浜、調使首、見」屍作歌」の題詞を持ち、「母父が 愛子にもあらむ 若草の 妻もあるらむ」（三三三九）の異文を持つ。また、反歌は、「母父も妻も子どもも高々に来むと待つらむ人の悲しさ」（三三四〇）とする。

（7）くだっては、田辺福麻呂歌集「過」足柄坂 、見」死人」作歌」の、「国問へど 国をも告らず 家問へど 家をも言はず」（巻九・一八〇〇）に、「国―家」の対が見える。

（8）巻十三に「父母に知らせぬ子ゆゑ」（三二九六）とある他、時代が下る例として、虫麻呂歌集、福麻呂歌集、家持、及び天平勝宝七歳の防人歌群に例が見える。

（9）「旅行きに行くと知らずて母父に言申さずて今ぞ悔しけ」（巻二十・四三七六、川上臣老）、「月日夜は過ぐは行けども母父が玉の姿を忘れせなふも」（巻二十・四三七八、中臣部足国）に見え、諸注は、「母父」

を「母父」の訛りとする。

(10)『日本古典文学大系　萬葉集一』、西宮一民氏『萬葉集全注　巻第三』、『日本古典文学全集　萬葉集一』、伊藤博氏『萬葉集釈注』等。

(11)「荒雄らは妻子が業をば思はずろ年の八年を待てぞ来まさず」(巻十六・三八六五)、「父母を　見れば尊く　妻子見れば　かなしくめぐし」(巻二十・四一〇六、家持)。

(12)『新日本古典文学大系　萬葉集二』は、「父母」を「尊人」とする例として、『大乗阿毘達磨雑集論十六』を挙げる。「尊人有二二。一別二共。共又二種。一護二世間一。二応二供養一。別亦二種。謂父及母一。」(『大正新脩大蔵経』瑜伽部下)

(13)なお、『萬葉代匠記』には、「鍾二憐愛一」の訓が見える。

(14)「憐」と「愛」については、『爾雅』(釈詁、巻二)に、「悖・憐・惠・愛也」という訓詁が見え、空海『篆隷万象名義』にも「憐　力田反　愛也哀也」とあることから、「憐」「愛」の語義は重なると見てよい。

(15)『戦国策』(趙四、「趙太后新用事」)では「愛憐」に作る。なお、姚本、鮑本において本文に異同はない。

(16)このように形容詞を重ねる憶良の表現には、たとえば、「世の中を憂しとやさしと思へども」(巻五・八九三)があり、既に、芳賀紀雄氏「貧窮問答の歌―短歌をめぐって―」(『萬葉集における中国文学の受容』所収)によって、漢語「厭恥」「愧厭」「羞厭」の影響が指摘されており、「めぐしうつくし」についても、漢語の影響を受けた表現である可能性があるかと思われる。

(17)「白たへの　袖折り返し　紅の　赤裳裾引き」(巻十七・三九七三、池主)。なお、挽歌において、悲嘆する女性について用いた「裳―衣」(巻二・一九四、人麻呂)、「裳―衣手」(巻十五・三六九一、葛井子老)の対の例が見える。

(18)天照らす　神の御代より　安の川　中に隔てて　向かひ立ち　袖振り交はし…(巻十八・四一二五)。

(19)もと「阮」に作るが、『芸文類聚』は馮校本によって改めたとある。

(20)『古詩紀』は題を「南城門老」に作る。

(21)拙稿「景物と人事―山部赤人の対句―」「日本語と日本文学」四二、平成十八・二。

付記

稿を成すに際しまして、終始、芳賀先生の御指導を仰ぎました。末尾ながら、記してあつく御礼申し上げます。

(たなか　まり　筑波大学大学院博士課程
人文社会科学研究科　日本文学)